【12 月　師走（しわす）】

　その年のまとめ。新しい年を迎える準備で、至る所で忙しく動き回る様子が見られます。また一年で一番昼間の短い冬至の日もこの月にあります。魔の入る夜が長い日に、魔除けとして「黄色い物」「『ん』のつくもの」を食べて幸せを祈る風習があります。

＜12 月の行事＞

20日ごろ	冬至
25日	クリスマス
31日	大晦日

冬至

二十四節気の一つで、太陽の位置が1年で一番低くなる日です。太陽暦では 12 月 22 日･23 日ごろとなります。

昔から冬至は太陽が生まれ変わる日と考えられ、冬至を過ぎると太陽の力が蘇るとされてきました。

「冬至 10 日前から藁の節だけ日が長くなる」「米の粒だけ日がのびる」「畳の目だけ日がのびる」などともいわれます。

冬至の風習

●食べ物

冬至には、カボチャを食べるというところが多いです。秋に収穫したカボチャをこの日まで保存しておき、煮て食べます。冬至カボチャを食べると風邪をひかないと言われるためです。同じ理由で、小豆粥を食べるところも多いです。奈良県吉野地方では、この粥を食べると蛇が逃げるとも言われています。関東地方とその周辺では、コンニャクを食べて体の砂下ろしにするといい、中国地方の日本海沿岸部では、豆腐を食べると風邪をひかないとも言われています。東京周辺では柚子を食べる風習や、北海道では「いとこ煮」と言ってカボチャと一緒に小豆・砂糖も入れて煮る風習もあります（煮たカボチャに甘い湯で小豆を絡めるのも同じです）。

●柚子湯

冬至の夜に柚子を入れた風呂に入ることもよく知られています。柚子湯に入ると、風邪をひかない、1 年間病気にならない、などともいわれています。

阿蘭陀（おらんだ）正月

長崎では、長崎出島のオランダ商館から始まった冬至の行事があります。江戸幕府によるキリスト教禁令のため、表立ってクリスマスを祝うことができなかったオランダ人が、代わりとして冬至に合わせて「オランダ冬至」として開催し、また日本の正月の祝いをまねて、太陽暦による正月元日に、出島勤めの幕府役人や町役人、オランダ語通訳者たち日本人を招いて西洋料理を振る舞い、オランダ式の祝宴を催しまし、これを長崎の人々は「阿蘭陀（オランダ）正月」と呼びました。

牛肉や豚肉、アヒルなどの肉料理やハム、魚のバター煮、カステラ（ケーキ）、コーヒーなどで御馳走してもてなしをしていたようです。

クリスマス

　クリスマス（英語: Christmas）は、大多数のキリスト教教派が行う、イエス・キリストの降誕を記念する祭です。キリスト降誕祭、降誕日、聖誕祭、ノエルなどとも呼ばれます。「クリスマス」という英語は「キリスト（Christ）のミサ（Mass）」という意味に由来します。 ほとんどの教派で、教会暦上の 12 月 25 日に祝われます。 あくまでキリストの降誕を記念する日であり、イエス・キリストの誕生日というわけではないようです。

クリスマスツリーはなぜもみの木？

　クリスマスにプレゼントと同じくらい欠かせないのはやっぱりクリスマスツリーですよね。飾り付けをして、靴下をぶら下げて、あとはサンタクロースを待つのみ！でもちょっと待ってください。そもそもなんでクリスマスツリーってモミの木なんだろう？他の木じゃダメなのでしょうか。

　そもそもクリスマスツリーは、キリスト教からではなく、古代ゲルマン民族のお祭りから伝わったとされています。古代ゲルマン人が住んでいた北欧は寒さが厳しいですが、そんな過酷な環境の中、モミは冬の間も元気に緑の葉っぱがついている常緑樹のため、「永遠の命の象徴」としてあがめられていたようです。また中世のドイツではモミの木には小人が住んでいるとされ、飾り付けをすると小人が集まってきて人に力を与えてくれると信じられていたようですよ。

　みんなでクリスマスツリーに飾り付けをして、小人たちと楽しく過ごしてみてはいかがですか？

真っ赤なお鼻のトナカイさん

　サンタクロースのお仕事を手伝っているトナカイさんが全部で8頭いるのをご存知でしたか？さらにはちゃんと名前まであるんですよ！今回はそんな働き者たちの名前をご紹介します！

①Dasher／ダッシャー
②Dancer／ダンサー
③Prancer／プランサー
④Vixen／ヴィクセン
⑤Comet／コメット
⑥Cupid／キューピッド
⑦Donner／ドナー
⑧Blitzen／ブリッツェン

　この名前は 1800年代にアメリカで作られた詩がきっかけで広まりました。最初はこの 8 頭だったのですが、のちに 9 頭目の Rudolph/ルドルフというトナカイが登場します。実はこの 9 頭目があの有名な歌に登場する真っ赤なお鼻のトナカイさんです。

　明日からは真っ赤なお鼻のルドルフさんは～♪と歌ってみてくださいね♪

大晦日（おおみそか）

光陰（こういん）矢の如しとはよく言ったもので、一年の最後の日、大晦日はあっという間にやってきます。今年を振り返ってみて、どんな一年になりましたか？

旧暦では毎月の最終日を晦日（みそか）と言いました。元々“みそ”は“三十”であり、“みそか”は30日の意味でした。旧暦では日数が多い月（大の月）と少ない月（小の月）があるため、晦日が29日のこともありました。年内で最後の晦日を「大晦日」と言い、新暦では12月31日のことを指します。

大晦日の歴史

日本における大晦日という慣習は、日本文化に古くからある歳徳神（としとくじん）への信仰に基づく儀礼から生じています。年の初めから来られるため、「正月様（しょうがつさま）」とも呼ばれ、各年によって来られる方向が異なり、その方角は「恵方（えほう）」と呼ばれます。

この神様は各家々に訪れると昔から信じられていたため、神様をお迎えして食事を共にするために、大晦日から「年籠（としごも）り」をして、元旦も家で過ごすことが一般的でした。

元旦に、恵方にある近所の神社へ参拝する「恵方まいり」をすることもあります。後に、庶民が正月三が日などに神様に願いを伝えるために神社へ参賀する「初詣」を行うようになっていくとともに、年籠りの習慣は次第に失われていきました。

大晦日の行事

大晦日には、様々な年越しの行事が行われます。大晦日の夜のことを除夜（じょや）ともいい、かつては、除夜は年神を迎えるために一晩中起きている習わしがあり、この夜に早く寝ると白髪になる、しわが寄るという俗信がありました。

大晦日の伝統的な風習には次のようなものがあります。

・年越し蕎麦（地方によっては他の食事）
・除夜の鐘（108 つの煩悩をはらう）
・二年参り（深夜零時をまたいでのお参り）
・雑煮（大晦日の夜からが始まる、正月の食事をとる家庭もある）

みなさんは、大晦日の行事といえば何を思い浮かべますか？地域や家庭によって、様々な風習があります。色々な地方の方や、身の周りのおじいちゃん、おばあちゃんなどに聞いたりして、調べてみましょう。

良いお年を・・・？

年末が近づくと、「良いお年を」と挨拶しますね。かつては「大晦日までの忙しい日々を無事にお過ごしください」という意味で使われていましたが、現在では「大晦日までを無事に過ごし、良いお年（新年）をお迎えください」という意味で使われます。

12月の中旬、大掃除やお正月飾りの準備などをする頃から使い始めると良いようですが、大晦日には年越しの準備が既に整っているとされるため、「良いお年を」と言うのは適していないようです。

また、大晦日は神さまをお迎えする日なので、大掃除はその前までに終わらせましょう。師走は忙しいですが、計画的に年越しの準備をして、すっきりとした気持ちで新年を迎えられるといいですね。それではみなさん、良いお年を！！